

赤いシャツを着た男の子に、牛が突然、襲いかかった。倒れた彼を救おうと、幾人もの人々が駆け寄ってくる。だが「その子は『不可触民』の子だ!」——。人垣の後ろから上がった非情な一声に、救いの手はみるみる遠のいた。現場に残った25歳の青年は、友人と2人で男の子を抱きかかえ病院をめざすも、たどり着く前にその子は事切れた。

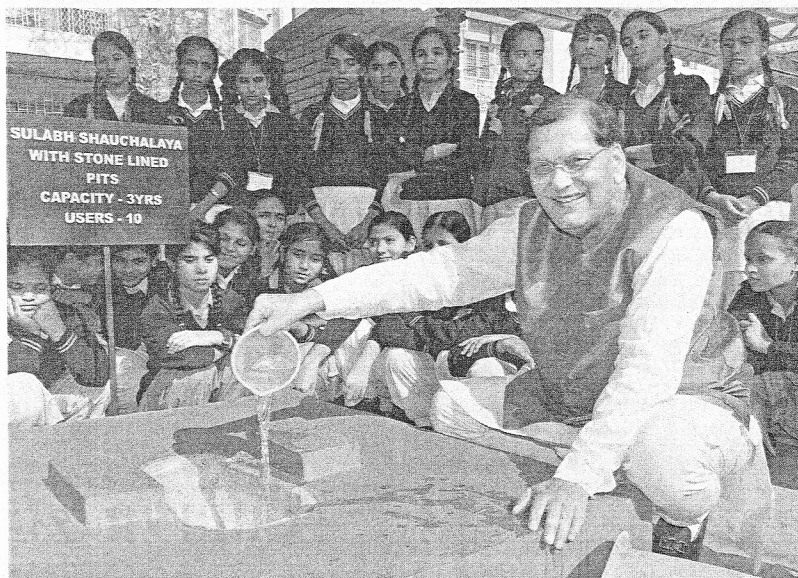
インド東部ビハール州の町の市場で起きた1969年冬の出来事だ。そして小さな命を救えなかったこの青年こそ、インドに水洗トイレを普及させたビンデシュワル・パタク氏だ。縁もゆかりもない「10歳か12歳くらいだった」男の子の最期は、半世紀を経た今も、パタク氏の脳裏に焼き付いて離れない。

不可触民は、古代インドからある4階級の身分制度「ヴァルナ」のさらに下層に位置づけられてきた人々の末裔(まつえい)だ。彼らは自らの階層を「ダリット」と呼ぶが、英語では「アンタッチャブル」と呼ばれ、触れてはならないと差別されてきた。夜明けとともに上位階層の家々を回って便所を掃除し、集めたふん尿を町や村の外れに運んで廃棄する仕事に従事させられてきたからだ。

家々の清潔さと人々の健康

文化・社会部門 ビンデシュワル・パタク氏

インドのNGO スラブ・インターナショナル創設者



パタク氏はトイレ普及に身をさげしてきた(ニューデリー)

トイレ普及で差別撲滅

を守る重要な役回りなのに蔑まれる矛盾。「水洗トイレの普及が差別根絶の第一歩だ。こう思い至ったパタク氏が70年に設立したのが「便利トイレ組織」を意味する非政府組織(NGO)「スラブ・シャウチャラヤ・サンスタン」(現スラブ・インターナショナル・ソーシヤル・サービス・オ

ーガニゼーション)だ。「便利トイレ」と呼ぶ2槽式の水洗トイレは、パタク氏が独学で考案した。1畝の水を流すと排せつ物は便器から排水溝を伝って1槽に流れ込む。満杯になるとその槽では肥料を作り、他方の槽が排せつ物の受け皿となる。肥料は無臭で農業の役にも立つ。

技術は整ったのに資金が集まらなかった。トイレの設置費用は当時の為替レートで1基33ル程度。補助金を申請しに行ったビハール州政府の上級官僚は「誰がそんな物にお金を出すんだね」と一笑い付す。仕方なく知人から借金したが、今度は設置許可が下りない。73年7月に最初の2基

を同州の町アラールに据え付けるまでの数年は、理解を得ようと奔走するが糸口すらつかめず「自殺も考えた」(パタク氏)苦難の日々だった。心の支えは国父マハトマ・ガンジーだった。69年のガンジー生誕百年祭に向けた準備組織に加わり、その事務局長に「ガンジーが夢見た不可触

民の救済を、君が成し遂げるのだ」と言われたのがそもそものきっかけだった。「まずインドをきれいにし(=不可触民を救済し)、それから独立したい」と言ったガンジーの言葉の数々を励みとした。最初の2基が設置できると評価は一気に高まった。74年にスラブ式トイレは政府に新しい概念の公衆トイレとして認められ、全国に広まった。世界保健機関(WHO)やユ

ニセフにも受け入れられた。NGOが設置した公衆トイレは西部マハラシュトラ州の2800カ所を筆頭に全国で8500カ所、家庭用トイレは150万カ所を超える。パタク氏のデザインを用いた政府設置トイレも6千万カ所と、急速に広がった。

それでもトイレの普及率は「まだ50〜60%」程度だ。野原ややぶで用を足す人々は今も多く、女性が暴行を受ける事件が後を絶たない。「1村に1人派遣できればトイレ設置を啓蒙できる」とNGOでは指導員を派遣する。

パタク氏にはいま、心強い同志がいる。お茶売りから身を立ented庶民派のナレンドラ・モディ首相(67)だ。「私の出自は小さい。そして小さな人々のため小さい問題に取り組みむ信念がある」と言うモディ氏は「ガンジーの生誕150周年の2019年までにすべての家庭にトイレを設置する」という目標を掲げる。

目標は遠い。だがパタク氏の地元ビハール州の村でも、モディ氏の地元、西部グジャラト州の町でも、不可触民が他の人々と共に食事する風景が見られるようになった。13億人の国の変化は時間がかかるが、パタク氏が半世紀前に願った差別撲滅というゴールは確実に近づいている。

「ニューデリー」黒沼勇史

「社会の恥」現場へ走り訴え

横顔

1943年にインド東部ビハール州で生まれたビンデシュワル・パタク氏は、4階級の身分制度「ヴァルナ」では一番上に位置するバラモン家庭出身だ。幼少期に「アンタッチャブル(不可触民)に触れるとどうなるのか」という好奇心を抑えられず、不可触民の女性に触れたことがある。すると祖母が激怒した。牛のフンと尿、そしてガンジス川の水を飲み込む罰を与えられたという。

1968年から69年にかけて不可触民の村に3カ月住んだことがある。その際も差別の伝統が立ちはだかった。自分の家族、妻の両親、バラモンの地域社会に猛反対され「義父には『おまえには会えない』と怒鳴られた」と振り返る。だが牛に襲われ

た男の子の死や、ふん尿運びを強要され泣き叫ぶ不可触民の花嫁らを目撃するにつれ、パタク氏は家族の反対に聞く耳を持たなくなったと述懐する。最初のトイレ2基を設置したビハール州アラールで「不可触民がまだ、ふん尿運びをさせられている」という一報を受けた際には、NGO本部のあるニューデリーからすぐに飛んで行った。

周囲の制止も聞かず不可触民に合流し、長柄のスコップで家々から排せつ物をかき集め、一斗缶に流し込んだ。そして彼らと同様、それを頭上に載せて町外れまで運んで捨てるに「この吐き気を催す仕事を彼らに毎日させ続けるのは我々の恥、社会の恥だ」と訴えた。75歳。